その合流点付近を、地元では大山川と呼びますが、地名としては現在残っていません。登さんは古い地図を調べ始め、その結果、古くは現在の入遠野川が大山川と呼ばれていたらしいことに気づきます。その最下流域に「大山川」という地名もあり、やがて正式な名称としては消え、そして今、少しずつ忘れ去られようとしています。

川っぺりの小宇宙

「いわき遠野物語り」（佐川義文）の中に、入遠野川の川っぺりの名称を記録したものがあります。オモンばあさんがその前に住んでいたという「オモンバの淵」。同じ理由と思われる「たーあんにゃの下」「三人兄弟」。おシゲさんが身投げした淵「シゲズバ」。アリが通るような細い道があった「蟻んど」。自然が、人々が、生活が匂い立つような呼び名。貴重な記録です。「馬入れ場」「馬洗い場」という呼び名も記されていました。あ、そうです、私は馬の話を辿っていたのでした。

馬どころ深山田

前述の「おらがまち遠野」には、昭和28年1月1日現在の、上遠野村の、集落ごとの馬の数が記されています。最も多かったのは深山田で95頭。よし、深山田に行ってみましょう。立派な鳥居が目に留まりました。わ、すごい注連縄…。

野良に出ていた方に訊ねてみると「リュウコさんに訊ぐどいいよ。」とのこと。

「今の若い人は分がんないよ。」と生田目柳子さん。このへんでは春の代掻きが終わるともう山に放したとのこと。「あれ。あの山がずーっと牧野だがら。」北方になだらかに連なる里山。そこが馬の放牧地でした。「とぎどぎは沼にハマったりなんかして死んだりするごどもあるでしょ。そうすっとみんなで行って担いで来て、肉食べだのね。あだしはいやで食べられながった。そご入って行ったどごに馬捨て場ってあって、そごさ埋めでね。行ってみっかい？」ぜひお願いします！

ひょいひょいと山に入って行く柳子さん。「こごさ埋めだの。集落ごどにあったもんだよ、こういう場所は。」たくさんの馬頭観音が斜面に並び、往時を偲ぶことができます。「ハァ息きれだ。昔はなんでもながったげど。あはは。」

鄙に稀なる大藪観音

馬産農家が深く信仰していたのが大藪観音。創建時は三層造りだったという言い伝えがありますが、現在は一層。端々に贅を尽くした意匠が見られます。

その昔、このお堂には御神馬と称する持ち馬があり、例祭にはおみくじが催され、当選者がその馬をもらい受けたといいます。その馬に仔馬ができると、それが新たな御神馬として献上され、またおみくじにかけられました。しかしこの行事はいつしか廃れ、現在は御神馬として白馬の像が安置されています。

平成に入って大修理が行われた際、2,500余枚の木札が見つかりました。札には住所氏名と番号が。特別に見せていただきました。御神馬当てのおみくじの名残で、富くじのようなものが行われていたのかもしれません。

いつかの青年と

もう少し馬のお話をお聞きしたいと思っていたところ、「下滝の蛭田和司さんなら」という噂。家を訪ねましたが、山仕事で留守だとのこと。奥様のイネ子さんに来た目的を告げると、「んでは、そご行ってみでください。炭窯のどごにいっと思います。」炭窯ですか？！なんと和司さんは、遠野で炭を焼いている最後の一人だったのでした。

「震災で10年使ってだ窯が落ぢっちゃった。もう無理がなど思ったんだげど。」窯を作るのは重労働。あきらめようとしたその時、息子さんがこう声をかけてきたそうです。「退職したらオレも焼きたい。もう一度窯を作ろう。」

仲間に手伝ってもらって一日で作り上げる炭窯を、夫婦と息子の3人で、何日もかけて作りました。「昔はもぢろん山ん中さ作ったげど、行ぐのも大変だがらね。ダムが出来だあどがな、ここさ作るごどにして。」三昼夜火を入れると云う炭焼き。次回は呼んでいただけることになりました。嬉しいです！

おうちに戻ってお話を伺うことに。すみません…。改めて馬のお話を尋ねると「あの本、どごだべ？」イネ子さんが持って来てくれたのは例の「おらがまち遠野」。なんと、あの「おせり」の写真で仔馬を引いていたのは26歳の和司さんでした。「こうやってぐるーっと引いで周ってね。馬喰が手ぇ挙げで、いぐらいぐらって言う。値段が決まっとその後は、湯本どが、植田の駅まで引いでったもんだ。そごで引き渡して、やっと金がもらえだのね。貨車に乗せんのが容易でねくて、いやー難儀した。」昨日のことのように話す和司さん。

手を動かすということ

「匠の里」で、和紙の工房「学舎」が開所すると聞きました。遠野の和紙は、棚倉藩時代に奨励されたこともあって古くから非常に盛ん。明治 20年頃は約600戸が生産していたといいます。現在最後の1戸となってしまいましたが、そのお弟子さんたちがここで紙漉きの技術を学び、伝えていくのです。もしかして、と思いましたがやっぱり。そこにはいつもと変わらぬ蛭田登さんの姿がありました。体調が悪いとおっしゃってましたが、みなと言葉を交わし、機敏に位置を変えながら、着々と必要なカットを押さえているようです。さすが。

来賓の方々には、「遠野和紙」のDVDが配布されていました。48分のフルバージョンです。贅沢。

登さんというメディア

最後はここに来ようと決めていました。上遠野の目抜き通りにある小松医院。こちらの待合室で、登さんの映像作品が流されていると聞いたのです。「あら、あの人よぐ映ってるわ、なんてワイワイ言いながら見でんの。」と診察後、送迎車を待っていた奥様。モニターには入遠野中学校の生徒による「よさこい」が映されていました。

やがて本編が終わり、テロップが流れます。遠野町の現住人口？ 明治時代からの人口の推移が流れます。明治31年5,777名、昭和24年がピークで12,028名、そこから減り続け、平成25年12月1日現在5,771名。つまり現在は明治31年とほぼ同数です。へえ…。続いて出生？これは先月のことですね…。

遠野　男子0名　女子0名
田人　男子1名　女子0名
三和　男子1名　女子0名
川前　男子0名　女子0名

登さんは毎月、市の現住人口調査結果表からこのテロップを更新し、少子化の危機を静かに訴えているんだそうです。ああ…心の底から参りました。登さん、あなたは唯一無二、最高の地域メディアです。いつかあなたの偉業に世間が驚く日が来ます。それまでは仕方がないのでミミが個人的に！「もーメチャクチャ最高みみたす地域メディア大賞」を捧げます！いつまでもお元気で素晴らしい映像を撮り続けてください！

光と石と紙と手と

石碑にはじまり、書物、歌、写真、映像、想い、そして実作業の継承。いろいろな記憶のカタチがあり、またそれらは複雑に絡み合って、しかし長い長い歴史の中ではいつか忘れられていくのかもしれません。馬産絶えて50年。今拾い集める昔語り。「あの頃は、暗いうぢがら山さ入って馬の草刈って、蚕さまもやった、煙草もやった、蒟蒻もやった、楮もやった、夜には囲炉裏っ端で、葉のしだぁ、藁仕事だぁ、子どもだって勉強する暇もながった。」みんなが口を揃えます。忙しかった、それが当たり前だった。「今はやるごどなくてね。退屈しっちまね。」折笠サト子さんは何かを愛おしむように、穏やかな表情でそうおっしゃいました。まだまだこの地を去ることができません。まだまだみなさんのお話を聞いて歩きたいです…。うしろ髪ひかれ、遠野いざよい散歩。

みみたすレシピ No.6 遠野篇

入遠野の赤っから芋で作る煮しめ

包芳さん、サト子さん夫妻のお宅を二度目に訪れた時に、「ごはん食べだの？」とお煮しめを出して頂きました。そのお芋がかなり大きくて、ちょっと変わった質感・・・。これはなんてお芋ですか？「アガッカラノイモ。」・・・え？「芋ガラが赤いの。」ああ、茎が。正式名称は？「トウイモっていうだげどね。」 これが絶品。今回の料理はこれで決まりです！ サト子さん、お願いします！

材料

- トウイモ
- 人参
- 牛蒡
- 大根
- 椎茸
- 鳥モモ肉
- 凍み豆腐
- しらたき
- 結び昆布
- さつま揚げ

などなど。

※煮汁は醤油、砂糖、カツオだし調味料です。

沢から引いた水でゴシゴシと洗い、皮を剥きます。その包丁、薄いですね。「これね、遠野の鍛冶屋さんに打ってもらったの。長谷川さん。ちょっとこご、おっ欠いちゃったげど、使いやすいだよね。」結構厚く剥きますね。「そうだね。これくらいね。」刃が薄いから切りやすそう。「そうそう。だがら切れんの。」

まず煮汁を作って、堅いものから順番に入れていけばいいそうですが、「忙しいどきはあれだげど、大根、ごぼうは湯がいどいだほうがいいね。芋たげやっこぐなっちゃったりすっから。」

折笠サト子さん

干してある芋ガラを見せて頂きました。確かに赤いです。「ジャガイモど味噌汁にすっと旨いよ。芋ガラも甘いんだコレは。」とサト子さん。

おまけ ～包芳さんの手仕事～

芋ガラを見てキャッキャ言ってたら包芳さんがこんな話をしてくれました。「昔は遊ぶもんなんてねーがら、石に芋ガラをこうぐるぐる巻いで、ボール作ったもんだ。グローブなんてねぇし、まどもに捕るど痛えがら、ぐっとこう引きながら捕って、そうして遊んだもんだ。」包芳さんは今日は正月の注連飾りを作っていました。旅館などに乞われて大きな注連飾りも作るそうですが、これは自宅用のもの。「ここは60軒くれーあっけども、もうやる人いねーな。」あざやかな手つき。これは逆綯いですね。「んだ、左手が上。」綯う方向で右綯えと左綯えがあります。写真右側に立てかけてあるのが神棚に上げる正月飾り。春になると苗代から引いた苗を、これをほぐした藁で縛ったそうです。「何事もカラダ使うのが基本。一番大事なごどだどオレは思うよ。」包芳さんの言葉です。包芳さん、ありがとうございました。